

写真の虚実

仏像写真展

「大和の仏たち―奈良博写真技師の眼―」閉幕によせて

当館学芸部資料室員 佐々木香輔

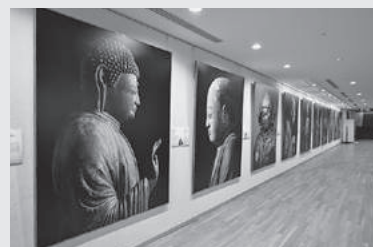
写真に深く関わっている者こそ、実は写真をあまり信頼していなかったりもする。一眼で立体を描写する限界、色の再現性、光源の角度やカメラの位置による見え方の違いなど、知れば知るほど写真は「真を写さない」ことがわかる。そんなシステムに写真という言葉をあてがわれ、その言葉を掲げた職を担わなければいけないのだから、写真技師の心中は穏やかではない。

では、写真が写し出すすべてが虚像かと問われると、そうは言い切れない。絵やCGと違い、写真は眼前に被写体がない限り写すことができない。必ずこの現実の世界に、カメラのレンズは焦点を合わせ、真実は写さないかもしれないが、この世界のある事象は写している。

写真は、複雑に入り組んだ世界から切り取る、撮影者のあるひとつの視点である。例えば客観的と表される写真でも、そこには客観的に撮るといふ撮影者側の意図が入り込む。どこまでいっても、撮影者はその意図と付き合い撮影をしていかなければならない。

右記したように、写真はこの世界の事象と密接に関わりながらも、フィクションをも持ち合わせるメディアである。フィクションという言葉からは「虚偽・虚構」など、マイナスなイメージも連想される。もちろん写真も「不正」に改ざんし、「虚偽・虚構」の画像を用いることは学術上あつてはならないことであり、細心の注意を払わなければならない。しかし、どこまで徹底し注意してもフィクションを持ち合わせるのが写真である。そして、誤解を恐れずに言うならば、写真の魅力はそのフィクションの部分にこそあると私は思う。

仏像写真の嚆矢である小川晴暘が一部執筆し、昭和十一年（一九三六）に刊行



地下回廊における仏像写真展「大和の仏たち-奈良博写真技師の眼-」は、平成28年3月27日をもって幕を閉じた。仏像という立体物の写真に特化し、博物館写真の一端を紹介する当館初の試みであった。上段写真は展示風景、下段写真は関連イベント「仏像を撮ってみよう!」で参加者(60代・男性)が撮影した香薬師模造(当館蔵)。

された『最新写真科学大系 古美術写真・スポーツ写真撮影』（誠文堂新光社発行）には、赤外線撮影や建築物の撮影方法など、文化財を正しく撮影する技法が詳しく解説されている。その中で小川は、撮影した仏像の背景を減力法で黒く処理する技法の重大性を説き、「専門家と素人とはこの技術の有無で大體區別されるといふ位である」とさえ表している。減力法とは、ある薬剤をガラス乾板の膜面上に塗布し、乾板上の画像濃度を調整する技法であり、小川は必要に応じてこの技法で背景を黒くしていた。黒背景から浮かび上がる妖艶な仏像写真は、減力法という緻密な暗室作業によって初めて完成をする。小川の写真は、和辻哲郎の『古寺巡礼』、日本工房発行の対外グラフ宣伝雑誌『NIPPON』などに使用され、仏像の魅力伝える写真として当時の人々に受容されていく。現代の文化財写真技師からみても、この減力法は戸惑いを感じるほど大胆な技法である。しかし、この減力法による黒背景というフィクションが、仏像の魅力をより引き立たせることに成功しているのは疑いのないことだろう。

さて、虚も実も内包する写真で、文化財と向き合う現代の文化財写真技師たちは一体何ができるだろう。デジタル写真の時代になり、「虚偽・虚構」の悪用ばかりがニュースになる時代。いま一度、「写真」とは何かを考えながら、撮影に取り組んでいきたい。